

今日はイエス様が話されたたとえ話を先月に続けて見たいと思います。今回は 24 節まで、弟息子、いわゆる放蕩息子の話でした。25 節以下の後半に兄息子の話が語られています。前回、弟息子は親の遺産を先にもらって家を飛び出し、放蕩の限りを尽くしてそれを全て失ってしまいました。食べるにも困るようになって帰って来たその息子を、父は全くとがめることなく息子として迎え入れ、彼が帰ってきたことを喜び祝う宴会を始めたのです。そして今日は後半の兄息子の話になります。彼は弟とは正反対の生活をしていました。父の家において、父の仕事を手伝い、毎日畑に出て、真面目に勤勉に農作業にいそしんでいるのです。絵に描いたような孝行息子です。近所では「あの家の二人の息子は何と対照的なことか。弟はどうしようもないドラ息子だが、兄ちゃんは真面目で立派な孝行息子だ。あそこの親父さんも、弟は悩みの種で、兄貴は自慢の種だろうに」と噂されていたことでしょう。

さてその日も兄は畑に出て一日働き、くたくたになって帰って来ました。すると家の中から音楽や踊りのざわめきが聞こえてきます。何やら宴会が行われている様子です。僕の一人に「これはいったい何事か」と尋ねると、「弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。」と答えました。それを聞いた途端、兄は、怒って家に入ろうとしませんでした。彼がなぜ、何をそんなに怒ったのか、それはなだめに出てきた父に対して彼が語った 29 節以下の言葉に示されています。「ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下されたことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」この兄息子の気持ちは少し私たちには分かると思います。

実は、主イエスがこの二人の息子の話をお語りになったきっかけですが、それは 15 章の冒頭に語られています。取税人や罪人たちが主イエスのもとに集まって来て、主イエスが彼らと一緒に食事をしているのを見たパリサイ人や律法学者たちが、そのことを、神の教えを語る者として相応しくないと批判したのです。つまりイエス批判です。その批判に対する応答としてこの 15 章のたとえ話は語られたのです。流れで考えるなら、弟息子、放蕩息子は取税人や罪人たちのことを表しており、兄息子はパリサイ人や律法学者たちのことを表しているということになります。ということは、この兄息子の言葉は、2 節の「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」というパリサイ人や律法学者たちの主イエスに対する批判の言葉と重なり合います。ですからこの兄の気持ちは分かるというのは、主イエスを批判しているパリサイ人や律法学者たちの気持ちは分かる、ということにもなるのです。その批判たるやパリサイ人や律法学者たちは、主イエスに対して激しい敵意と憎しみを抱いていたのです。

そこでこの兄の言葉を改めてじっくりと味わってみたいと思います。「ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。」29 節。これが彼の自己理解です。彼はそれだけ真剣に、まじめに、熱心に、父に、つまり神様に仕えて生きてきたのです。立派な生き方をしてきたのです。パリサイ人や律法学者たちとはまさにそのような人々でした。それはすばらしいことであり、尊敬に値することです。しかしこの兄はそれに続いてこう語っています。「その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下されたことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」「それなのに」という言葉に、彼の思いが込められています。その思いとは自分は立派に生きている、お父さん（神様）に一生懸命仕えている、熱心に信仰に励んでいる、それなのに、お父さん（神様）はその自分の努力にちゃんと報いてくれている、という思いです。彼は「友だちと楽しめと言って、子山羊一匹」と言っていますが、彼が求めているのは牛でなくてもせめてやぎぐらいといった物を考えているのではありません。お父

さん（神様）が自分のことを重んじ、高く評価してくれていることがはっきり分かる印が欲しいのです。つまり、こんなに一生懸命生きているのに、お父さん（神様）はその自分の努力に何も応えてくれていない、と感じているのです。

どうして彼はそのように感じたのでしょうか。それを示しているのが次の言葉です。「遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」30節。ここに、彼の不満の原因があります。そんな弟がいることが原因なのではありません。その弟が食いつめて帰って来た時に、父がそれを喜んで肥えた子牛をほふったこと、父の弟に対する対応に我慢がならなかったのです。父が、あの弟のために肥えた子牛をほふったことを聞いたとたんに、彼の心に、父は自分のためには子山羊一匹すらくれたことがない、という思いが湧きあがってきたのです。自分のためには子山羊一匹くれない父が、あんな弟のためには肥えた子牛をほふる。結局、自分の努力には何の価値も認めてくれない。それが彼の怒りの中心なのです。

弟が遠くの国で放蕩三昧の生活をしていようと、その結果無一物になって苦しんでいようと、彼にはどうでもよいことでした。それこそ自分の好き勝手に生きた結果、大変な中を通っているわけなので自業自得だと言う思いです。しかしその弟が帰って来て、父が喜んで迎え入れたことによって、兄の心は怒りで満たされたのです。私たちも、他の人との関係の中で、このような怒り、嫉妬の思いに陥ることがしばしばあります。特に、自分の方が苦勞したり、努力したり、がまんしているのに、そうでない人の方が認められたり、よい思いをするようなことを体験する時に、私たちの心は、その人に対する、またそのようなえこひいきをしている神様に対する怒りで満たされてしまうのです。パリサイ人の人々や律法学者たちが、主イエスが神の教えを語りながら、取税人や罪人と親しげに食事をしたり、親密な会話が交わされているのを見て激しい怒りと憎しみを覚えたのはまさにこのことによってです。それを見た時に自分たちが神の戒めを守って熱心に信仰に励んでいることを否定されたような思いを彼らは抱いたのです。

兄は、弟のことを「このあなたの息子が」と言っています。自分の弟のことを、もう弟とは呼びたくないのです。そしてさらにそこには、父に対する不満が込められています。「あなたはあれを息子として迎え入れるつもりかもしれませんが、私はあいつを家族の一員と認める気はありません」という思いです。パリサイ人や律法学者たちは、取税人や罪人たちに対してそういう思いを抱いています。あんなやつらは神様のもとでの家族の一員とは認めない、という思いです。そのようにして彼らは、同じ神の民であり家族、兄弟であるはずの人々との関係を断ち切っているのです。それもまた、私たちがしばしば陥る姿です。人との比較の中で神様のえこひいきを感じるによって私たちは、神様に対して怒ると同時に、その人との関係を保てなかったり、人に対する怒りと憎しみに捉えられてしまうのです。このようにこの兄息子の言葉には、私たちが、神様に対して不満と怒りを抱くと同時に隣人に対しても怒り、憎しみ、嫉妬を覚え、よい関係を失っていく様子が、身につまされる仕方で描き出されています。

兄は怒って家に入ろうとしない、とあります。今やこの家族に起っているのは、帰って来た放蕩息子である弟が家の中で宴会の席に着いており、兄は外にいてそれに加わろうとしない、ということです。どう考えても父親と共に宴会にいるのは私であって、あんな勝手なことをして自業自得と言おうか落ちぶれてかえってきた弟であるはずがない。これは兄なりにもっている神様の公平さのものさしです。

彼は、自分は頑張って熱心に父に仕えているのだから、そこには報いがあるのが当然だと考えています。しかしそれは、彼が父の家に留まり、父と共にいることを実は喜んではいないことを意味しています。弟は、父の家にいることを束縛と思い、そこを飛び出しました。兄は家に留まっていますが、内心では彼も、ここにいることを喜んではいないのです。長男の責任もあり、弟が出て行ってしまったから仕方なく家に留まっているのです。ですから基本的には我慢しているのです。我慢しても弟の方が報いが大き

いというのなら、ばかばかしくてやってられない。こうも言えるでしょう。弟は目に見える形で、体ごと父に背いていますが、兄は、体は留まりつつ、心は同じように父に背き、父のもとから離れ去っているのです。ですからこの二人の息子の話は、立派な兄息子と親不孝者の弟息子ということではないのです。元は同じなのです。ここで興味深いのは兄息子が弟のことを「このあなたの息子が」と他人行儀な呼び方で読んでいるわけですがそれは「あんな奴と一緒にしないで欲しい」「あんな奴と同じところにいたくない」自分のプライドが許さないといった気持ちだと思います。ところが位置関係でいくと、そんな風に言われている弟息子は家の中で、しかも祝宴の真ん中にいるのです。父をはじめ家族、家の者たち、招待客がいます。まさに神の国の中にいると言えます。しかし、「あんな奴と一緒にしないでくれ」と言う兄息子は家の外にいるのです。この違いはどうして生まれたのでしょうか。それは弟息子がただ自分の罪深さ、惨めさを認め、神の憐みを求めて悔い改めたことによるものです。そのことから、兄息子のようにどんなに立派な生き方をし、人から評判が良い人であったとしても、それが罪の赦しと救いを保証するものにはならないということです。むしろ表面的な立派さ、正しさ、信心深さの陰に隠されていた彼の深い罪が表面に現れてきたのです。あえて言うなら弟は分かりやすい罪を犯し、兄は分かりにくい罪を犯しているのです。外から立派そうに見える者の内側にある罪、それは傲慢な思いであり、ここでは父の対応に文句を付けています。これは神に対しても上から目線で見るといってもない罪を犯していることなのです。

怒って家に入ろうとしない兄のところに、父が出て来てなだめます。兄のところに出来る父の姿は、前半の20節で、ぼろぼろの姿になって帰って来た弟息子のところに走り寄った姿と重なります。神様がご自分の家を出て、罪によって失われてしまっている私たち罪人のところに来て下さるのです。兄のところに出来る父の姿に、独り子をこの世に遣わして下さった神様の深い恵みが示されています。

父はなんと言って兄息子をなだめたのでしょうか。31節以下にその言葉が記されています。「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。」「おまえはいつも私といっしょにいる」、これこそが、何よりもすばらしいことなのです。ここには、どんな報いがあるか、他の人よりもどれだけ重んじられるか、などということではなく、一緒にいることをこそ喜ぶ愛の関係があります。天の父である神様を信じ、神の子とされて生きる場所には、神様との間にそのような関係が与えられるのです。父である神様が私たちを子として愛して下さり、「わたしのものは全部お前のものだ」と言って全てを与えて下さる、独り子の命をすら与えて下さる、その神様のもとで喜んで生きることをこそが求めるべき信仰なのです。兄は、父の家にいることによって現にこのような父の愛を受け、それによって養われていたのです。ただ兄はそのことに気づかないのです。そのことに気付いて欲しい、そのことの素晴らしさを知って欲しい、そして体だけでなく心も、私のもとに留まって、わたしと共にいることを本当に喜ぶ者となって欲しい、という父の願いがここに込められています。

次の言葉も、同じく信仰者たちがしっかりと聞くべきものです。「だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」。神様のもとを飛び出し、自分勝手に生きる罪によって行き詰まり、どうしようもなくなって、神様のもとに身を寄せようと願ってやって来る罪人を、神様は、主イエス・キリストの十字架の死によって赦し、子として迎え入れて下さいます。その救いの恵みによって、死んでいた者が生き返り、いなくなっていた者が見つかることを、神様ご自身が心から喜んで下さるのです。神様は、その喜びを全ての者と共に分かち合おうとしておられます。一人の罪人が悔い改めて主イエスの救いにあずかり、洗礼を受けて教会に加えられることを喜び祝う神様の祝宴に、私たちは招かれているのです。この招きを感謝して受け、神様の祝宴の席に着くことが、洗礼を受けて信仰者となることです。生まれつきの私たちは、人と自分とを見比べることの中で嫉妬や憎しみを覚え、兄弟姉妹との関係を破壊してしまうことの多い者です。兄弟のことを

「このあなたの息子」と呼んでしまうのです。する必要がないのに「一緒にしないでほしい」などと自ら関係を断ち切ろうとするのです。しかしその私たちに神様が、「あなたの弟は」と語りかけて、その兄弟と共に神様の祝宴の席に着くようにと招いて下さるのです。この招きによって私たちは、神様の家族となり、兄弟姉妹として生きることができるようになるのです。

父が兄をなだめ、祝宴へと招いている言葉でこの話は終わっています。兄はこの後どうするのでしょうか。父の招きを聞き入れて家に入り、弟と共に祝宴に連なるのでしょうか。それともその招きを拒み、もう、そんな父親の元で生きることは時間の無駄とばかり、今度は彼が、自分のもらう分の遺産をくれと言って家を飛び出していくのでしょうか。それを決めるのは私たち一人一人です。独り子イエス・キリストを遣わして下さった父なる神様が、今私たちを、神様の喜びにあずかる祝宴へと招いておられます。神との豊かな交わりに生きるようにと主は手を指し伸ばして下さっています。ぜひこの主イエスの招きに喜んで応答してゆきたいと願います。